

# 学校図書館を活用した「読み」を鍛える拠点校事業 実践記録

## こころとところをつなぐ力を育てる

～言語活動の充実を通して「読み」の力を育む授業づくりに向けて～

### 香南市立赤岡小学校

#### 実践概要：

教師が言語活動のモデルを作成して教材研究を行ったり、図書館教育と各教科等との関連を示したカリキュラム配列表や年間計画を基に、学校図書館を活用した授業づくりを行ったりしてきた。その結果、「読むこと」の領域における学力の伸びや、児童及び教師の学校図書館活用への意識の高まりが見られた。

キーワード：言語活動のモデルづくり、学校図書館活用、パスファインダー、新聞ノート

#### 1. 研究仮説

- ・授業者が、言語活動のモデルづくりを行った上で教材研究や単元計画表を作成することにより、目指すゴールに向かうために必要な指導や考えられる児童のつまづきを見通すことができ、付きたい力の育成につながるのではないか。
- ・各単元で付きたい力を具体的な児童の姿でイメージし、それに応じた言語活動を設定することで、児童に学習意欲や目的意識をもたせることができ、読解力が向上するのではないか。
- ・図書館教育の学び方指導と、各教科等の単元との関連が分かるカリキュラム配列表や、学校図書館活用年間計画を基に実践を重ねることで、児童の情報活用能力の向上を図ることができるのではないか。

#### 2. 実践方法

##### (1) 言語活動のモデルづくり

単元のゴールとなる言語活動のモデル（カード、リーフレット、新聞など）を教師が作成することにより、言語活動を通じた学習過程の設定や児童のつまづきへの手立てを考える。

##### (2) 学校図書館を活用した授業づくり

学校図書館資料を活用することで、教材文を使って学習したことを応用する場を設定し、資質・能力を育成する。その際には、学校図書館活用年間計画や、図書館教育と他教科等との関連が分かるカリキュラム配列表などを活用しながら指導を行う。

##### (3) 新聞ノートの取組（4年生以上）

新聞の中から記事の一つを選び、それをまとめたり感想を書かせたりすることで正確な読みの力の育成と読んだことについて考えをもつ力の育成を図る。

#### 3. 実践内容

##### (1) 言語活動のモデルづくり

取組1年目の10月に行った1年生の公開授業研究の際に、教師が児童に提示した言語活動の

モデルが、児童の意欲付けやゴールの見通しとなって効果的であったことから、全学年でモデルづくりに取り組むこととした。言語活動のモデルづくりには、児童への手立てと、教師の教材研究の二つの側面がある。

##### ①児童への手立てとして

児童に学習の見通しをもたせ、学習意欲を高めさせるために、単元の導入時に授業者が作成した言語活動のモデルを使って、単元末に目指す姿や形を具体的に示した。

カード、リーフレット、新聞など、どのような形式で学習をまとめるのかをイメージしやすくしたり、それを何のために作るのか（例：1年生に紹介するため。地域の人に知らせるため。など）ということを具体的に設定したりすることで、学習活動に必然性をもたせた。また、学級の実態に応じて、イラストなども取り入れ児童が関心をもてるようにした。（写真1）



写真1：教師が作成したモデル（1年）

また、教師が作成したモデルは、学習している単元の間中、学習計画とともに教室に掲示しておいた。そして、毎時間の学習に入る時に、学習計画と一緒に本時がモデルのどの部分に関わる学習かを示すことで、見通しをもたせるだけでなく、児童が自分の学習を振り返ったり、進捗の様子を確認したりする際の手がかりとしても活用した。個別の発展的な学習に取り組む際には、ヒントカードとしても活用した。児童は必要に応じて教師のモデルを参考にし、どこ

に、何を、どのように書けばよいのか確認しながら、自分の学習を進めていた（写真2）。



写真2：教師が作成したモデル（3年）

②教師の教材研究として

取組を始めた当初は、児童への意欲付けをねらいとしてモデルづくりを行っていたが、公開授業研究等で検討を重ねる中で、モデルを作成することによって教師側の教材研究にも役立つことが分かってきた。付けたい力を設定し、言語活動を吟味してモデルを作成することにより、その単元で身に付けさせたい力と言語活動が一致しているかを確認することに活用した。さらに、児童の姿を具体的にイメージしながら作成することで、つまずきを見通し、実態に合った学習計画や手立てなどを検討することも行った。

「プロフェッショナルたち」（東京書籍6年）を教材に学習した単元では、学習したことをもとに自分が考えたことを新聞にまとめて発表するという言語活動を設定した。初めは、自分が選んだプロフェッショナルの紹介と自分の将来について考えたことを書くことにしていたが、モデルを作成する中で、読み取ったことと自分の考えのつながりが分かりにくいという課題が見えてきた。そこで、

「私が考えるプロフェッショナルとは」という欄を設け、「文章を読んで自分の考えるプロフェッショナルについてまとめたことを発表し合い、考えを広げたり深めたりすることができる。」という言語能力を見取ることができるようにした。また、「将来、こんな人になりたい」という欄を設けて、「複数の人の仕事観について書かれた文章を読み、共通点や相違点を見だし、自分の考えに反映させることができる。」という情報活用能力も見取ることができるようにした。

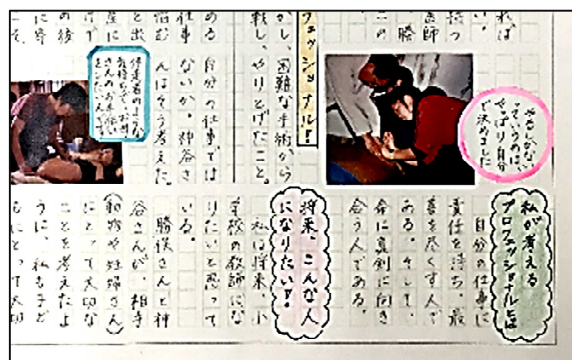
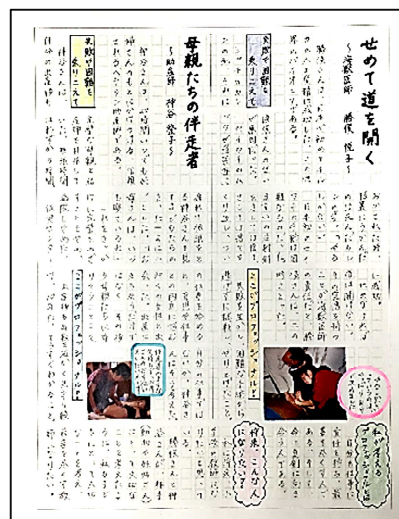


写真3：教師が作成したモデル（6年）

(2) 学校図書館を活用した授業づくり

①図書館資料活用のタイミング

「ビーバーの大工事」（東京書籍2年下）を教材に学習した単元では、第二次で教材文の読み取りを行い、ビーバーのひみつクイズを作る学習を行った。それをもとに、第三次では他の動物に関する図書を読み、クイズをつくる学習をした。このように、第二次に教材文で学習したことを使って、第三次では関連するほかの図書で発展的な学習をするパターンは各学年で最も多く取り入れている。

しかし、学年や学習の状況によっては、第一次で教師のモデルを見て単元のゴールイメージをもってから第三次の学習までの時間が長いことにより、児童の意欲が低下したり、ゴールが意識されにくくなったりする場合がある。

そのため、「いろいろなふね」（東京書籍1年下）を教材文とした単元では、第一次で自分の紹介したいのりものについて「のりものしょうかいカード」にまとめて紹介するという言語活動の見通しをもった後、第二次では教材文での学習と関連図書での学習を交互に行うようにした。

また、「はがぬけたらどうするの」（東京書籍1年下）では、第一次から第三次前半までの各時間に関連図書を活用する時間を設定し、一つの授業の中で教材文を使った読み取りの場面と、それをもとに関連図書を使って発展的に学習する場面の両方を設定した。

②パスファインダーの活用

本校では、これまでも学校図書館担当教諭が中心となって図書館活用を進めてきたが、各学年の担任の図書館活用の意識が高まらないという課題があった。そこで、担任が中心となって図書館活用を進められるように、各教科等と図書館教育の関連を示したカリキュラム配列表を作成したり、それに準じて学校図書館活用年間計画の見直しを行ったりした。

さらに、これらのカリキュラム配列表や年間計画、活用図書のリスト、これまでの実践記録などをまとめたパスファインダーを学年ごとに作成し、これを手がかりに図書館活用に取り組んだ。

例えば、5年生国語科の「わたしたちとメディアとの関わりを考えよう」の単元では、教材文の学習とともにメディアに関する図書の活用が考えられる。同時に図書館教育として「著作権と引用」について指導を行うことができる。さらに、「著作権と引用」の学習には、社会科の「情報化社会を生きる」の単元とも関連している。

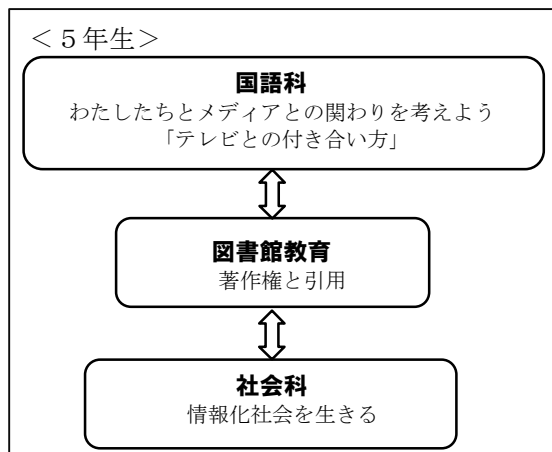


図1：図書館教育と教科等の関連の例

全教科等の1年間の計画を一覧表にしたカリキュラム配列表に、図1のような図書館教育と教科等の関連を組み入れ、学校図書館の活用が促進されるようにした。

活用図書のリストには、活用した図書の書籍名、著者名、出版社、分類、所在、校内数を記録するとともに、活用するのに適当であったかどうかを評価する欄を設けた。これは、活用する図書を選書する際に、その単元で重点的に取り扱う事項を指導するのに適切かどうかを検討するためのものである。(表1)

学年	単元名	どうぶつの04クイズを作ろう	所在：A(自校), B(野村), C(借読), D(読していない)
No.	書籍名	著者名	出版社
1	ふしぎ発見シリーズ① どうぶつの目	中川 志郎	アリス館
2	子どもの科学サイエンスブック パンダの知り大図鑑	倉野 浩	誠文堂新光社
3	こんちちは、ピーター	佐藤 美弥	福音館
4	どうぶつのかたがだこれ、なにに?①なんのくちびり?	今泉 忠明	ポプラ社
5	どうぶつのかたがだこれ、なにに?②なんのさび?	今泉 忠明	ポプラ社
6	どうぶつのかたがだこれ、なにに?③なんのつ?	今泉 忠明	ポプラ社
7	どうぶつのかたがだこれ、なにに?④なんのつばき-はね?	今泉 忠明	ポプラ社

表1：活用図書のリスト(2年)

(3)新聞ノートの取組(4年生以上)

これまでも本校では、新聞活用の一環として、朝の会・帰りの会等での新聞スピーチに取り組んできた。しかし、スピーチの内容については各学年に任されており、新聞の記事の紹介のみに留まってしまうという課題があった。

そこで各学年の形式を統一するため、4・5・6年生で新聞ノートの取組を始めた。これは、自分が選んだ新聞記事の要約と記事に対する自分の考えを書くこととし、週1回提出させ、年間を通して取り組んでいる(写真4)。

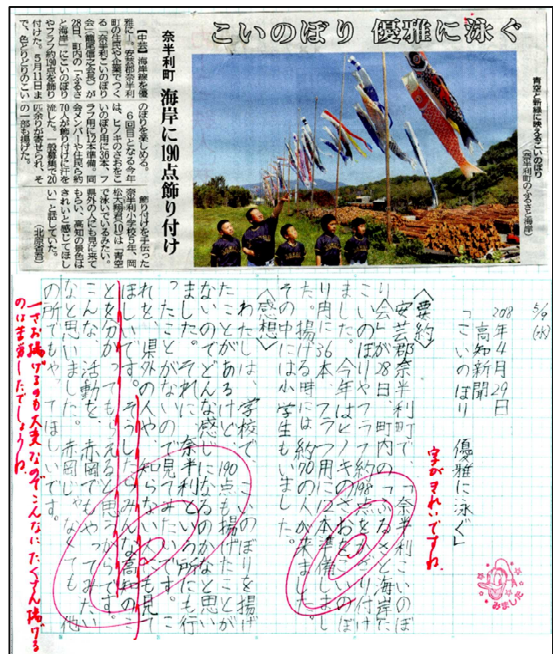


写真4：児童の新聞ノート

取組を始めた当初は、A4版ノートの見開きを使って、一方のページには選んだ記事、もう一方には新聞の日付、新聞名、記事の見出し、要約、自分の考えを書くという内容と、要約は140字以内、自分の考えは200字以上という字数制限を提示した。

2年目は、1年目の取組の様子から考慮して、6年生に対しては1年目同様の字数制限を求めるが、4・5年生については少し制限を緩やかにして取り組ませることとした。

4. 成果と課題

(1) 成果

①「読む」力の向上

2年間の取組の結果、高知県学力定着状況調査の国語科「読むこと」の領域におけるポイントに伸びが見られた。6年生については、県平均との比較において、取組開始前の平成29年度と、取組1年目の平成30年度の間で12.2ポイント向上していた。また、5年生については、同比較において、取組1年目の平成30年度と、2年目の令和元年度の間で、18.6ポイント向上していた。

長文の読解に苦手意識があり、問題や課題に対して粘り強く向き合うことの難しかった児童が、単元のゴールとなる言語活動を意識して意

欲的に学習に取り組む姿も見られ始めた。教師が言語活動のゴールモデルを作成し、教材研究を進めてきたことが効果的であったと考える。

## ②学校図書館活用に対する意識の変化

本校では以前から図書館教育を推進し、学校図書館担当教諭が中心となって図書館を活用した授業づくりに取り組んできた。しかし、担当教諭が受け持つ「読書の時間」での図書館活用が中心となりがちで、各学年の担任の意識が高まらないことが課題であった。そこで本年度より、各教科の内容に沿って見直した図書館教育の年間計画や、活用図書のリストをまとめたパスファインダーを作成し、これに基づいて各学年の担任が主となって図書館活用を進められるようにした。また、読書感想文・感想画コンクールなどへの取組についても各教科の学習と合わせて年間計画に組み入れることにより、全校で足並みを揃えて取り組むことができた。

その結果、年度間で教職員の異動に伴う一時的な落ち込みは見られるものの、児童にも教師にも図書館活用の意識の向上が見られた。特に、教師の意識の変化により、自発的に関連図書の選定を行ったり、各教科での活用を検討したりしている姿が多くみられるようになった。

(表2)

	平成30年度		令和元年度	
	5月	2月	5月	12月
児童	3.1	3.6	3.2	3.5
教師	2.4	2.9	2.7	3.3

【授業力チェックシートの設問項目】  
**児童7** 図書館の本や新聞などを使って調べたり話し合ったりする学習を行うことができた。  
**教師9** 児童生徒の知識や考えを広げたり、深めたりするために、図書館資料や新聞等を効果的に活用している。

表2：授業力チェックシートの結果

## ③授業改善への意識の高まり

言語活動のモデルづくりを中心に、公開授業後の研究協議などを行う中で、国語科の授業改善への意識も高まった。

<自由記述式アンケートより>

- 言語活動のモデルを作成することにより、児童のつまづきを事前に把握し、支援方法を検討することができた。
- 単元で身に付けたい力を明確にし、それに合わせて言語活動のモデルや単元の計画表を作成して授業に臨むようになった。
- 研究協議でモデルを見ながら自分の担当学年以外の教材について全員で一緒に考えることができ、その学年までに身に付けておかなければならない力を把握することができた。

## (2) 課題と今後の取組

### ①特別支援教育の視点を含めた「読む」力の育成

「読むこと」の領域における伸びが見られる一方で、各種学力調査の結果、全国平均・県平均との比較では十分に「読み」の力が身に付いている

とは言い難い。今後も授業改善に努め、学力及び学習への意欲の向上を図ることが必要である。

「読み」の力が身に付きにくい背景として、文章の読解の土台となる文字の読み取りが難しく、教科書を読むにも個別の支援を要する児童が少なくないことが挙げられる。そのような児童に対して、特別支援教育の視点から支援の方法を検討し、文章の読解へとつないでいく必要があると考えられる。本年度低学年に対し、多層指導モデルMIMの導入を試みているが、その効果が実感できるまでには至っていない。今後も取組を継続し、「読む」ことに対して苦手意識をもつことなく学習できるように支援していきたい。

### ②学校図書館活用及び図書館教育についての取組の継続

2年間の取組により児童・教師共に学校図書館活用への意識が高まっているが、パスファインダーの内容を年度ごとに見直し、新任の教師でもそれを手がかりに指導を行うことができる形にしていくことが必要となる。単元の中で関連図書を活用することについては定着してきた一方で、図鑑や百科事典などの学び方指導については、推進教諭が授業を行っていた以前と比べると、十分に指導が行き届いていない状況が若干認められる。今後は、年間計画に沿って図書館教育が推進されているか状況を把握するためのチェックを定期的に行い、取組が継続されるようにしたい。

また、児童の読書の様子から、学年内での読書量や読解力の差が大きいという実態がある。そのため、学習に活用する図書の選定が難しいという課題もあった。活用した図書を順次リスト化し、学級や児童の実態に応じて適切なものを選ぶことができるようにしたい。

### ③学びに向かう学級集団づくりに向けて

国語科を中心とした授業改善を目指して取り組んできた2年間であったが、取組の効果はその時の学級の状況によって左右されるということも見えてきた。学級が安全で、安心感のある居心地の良い場所であつてこそ、児童は落ち着いて学習に向かうことができる。親和的な学級集団を作ることが主体的・対話的で深い学びへの第一歩であることを意識して、学びに向かう学級集団づくりを進めていくことが重要である。

今年度2学期より取り組み始めた「赤小版授業スタンダード」など、全校で統一した取組を継続し、児童自身が見通しをもって学習できる環境を整えることも、学習への意欲の高まりにつながるのではないかと考える。加えて、どの児童も自身の成長を感じながら、学習への期待感をもって取り組めるよう、授業を行っていく必要がある。